

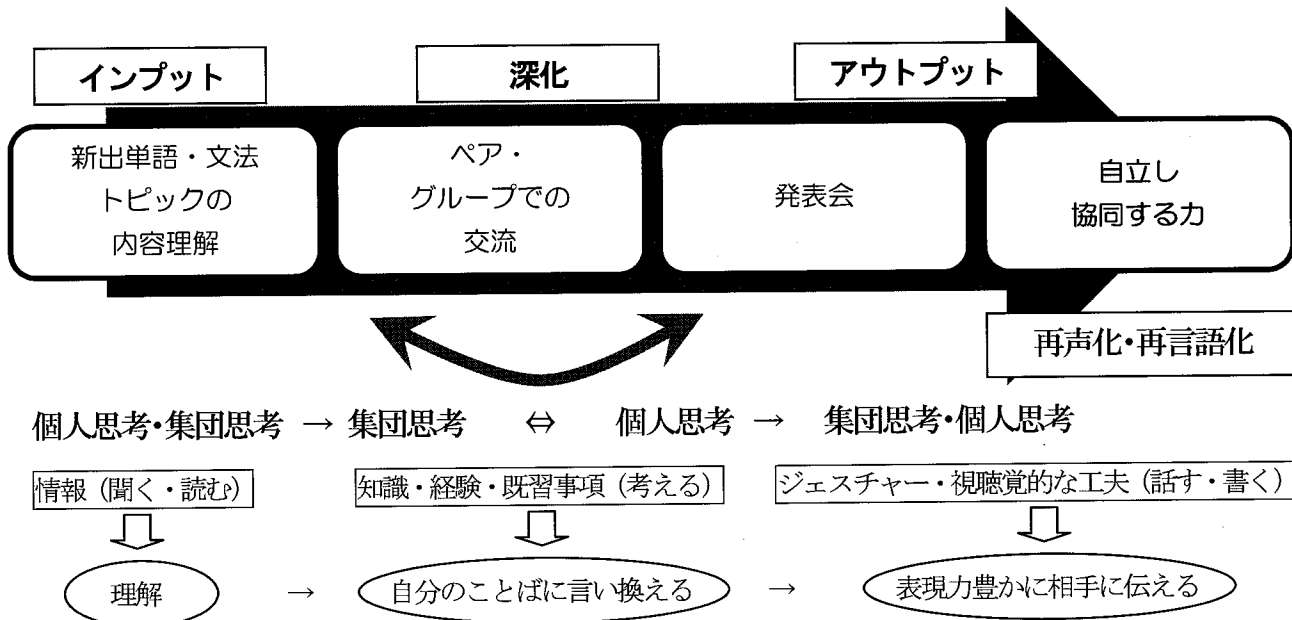
## 4技能を総合的に育成する英語学習の指導

～協同して取り組む活動を活かして～

英語科 板野 麻由美 吉田 雅子 山形 傑

### 1. 主題設定の理由

本校英語科では、「4技能を総合的に育成する英語学習の指導～協同して取り組む活動を活かして～」を研究主題として研究を進めている。インプット（「聞く活動」「読む活動」）をし、単元のまとめとしてアウトプット（「話す活動」「書く活動」）をするが、その間に何らかの形でペアもしくはグループで協同し、「深化」する活動をさらに取り入れることとしている。本校英語科では「深化」とは、英語で聞いたり読んだりした情報について、仲間たちと意見を交流したり他者の発表を聞くことによって情報の内容をさらに深く理解したり、自分が最初に持った意見や考えをさらに深める、コミュニケーションをよりスムーズにするためのことば選びとらえている。そして、「深化」を経て再構築された自分の意見や考えを、既習の語法を使って英語で相手に正確に伝えることを目標とし、それが本校の研究テーマである「自立し協同する力」につながると考えている。



今年度、小中高の12年間で自立し協同する力をつけるために池田地区附属学校研究会英語部では、国際人としての態度とコミュニケーション力を育むことを最終目標と設定した。大阪教育大学池田キャンパスが目指す子ども像として、

- ・確かな知識と能力を身につけた子ども
- ・国際性豊かな子ども

の3つを挙げられている。そのような子どもたちを育てるにあたり、英語部では、英語という言語を習得するだけでなく、世界中のどこでも通用する国際人としての態度とコミュニケーション力を育てる必要があると考えた。そして、その目標を12年間で実現させるために、小中高でそれぞれの発達段階における目標を設定した。

### 小学校

聞く・話すの2つの技能を使用して活動を行う中で、「限られたボキャブラリーの中で、自分の言いたい事をきちんと相手に伝えることができる」ことを目標とした。

### 中学校

読む・書くの技能が加わった英語教育の中で、「情報を聞いたり読んだりして内容を理解した後、自分の言葉で工夫して表現力豊かに伝えることができる」ことを目標とした。そして、身近な話題から現代の諸問題などのさまざまな題材を教材として使用し、国際人としての態度を身につける教育の基礎を固める。

### 高校

「社会事情に精通して問題意識を持ち、豊富なボキャブラリーを持って国際人として意見を言うことができる」ことを目標とした。

新学習指導要領にもある通り、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4つの技能をバランスよく育成することが必要である。本校ではさらに、情報をインプット（「聞く」「読む」）した後の活動として、その内容についてアウトプット（「話す」「書く」）する際に「表現力豊かに」「正確に」という目標を設定することにより、相手に正しく伝える助けになると同時に、わかりやすく伝えようとする態度、より正確に情報を理解しようとする態度が身につくと期待できる。

このように、全体に共通していることは、「相手に自分の思いを正確に伝える」ことである。英語でのコミュニケーション力を軸にして、それぞれの発達段階でできる工夫をさせるような授業を展開している。

英語科の授業では小中高ともに、「尋ね合う」「話し合う」「発表する」「相談する」時間を積極的に設定し、お互いに高め合いながら英語の表現の仕方や工夫を学ぶ機会を作っている。そのような他者との関わり合いの中で、英語の知識・技術だけではなく、相手に正しく伝えるために効果的な非言語コミュニケーションについても学び合えると考えている。

## 2. 実践の概要

### 表現を工夫して劇をしよう

#### 1. 対 象 中学校 第1学年A組 (41名)

#### 2. 単元設定の理由

本単元では、ルイス・キャロルが1865年に出版した空想物語『不思議の国のアリス』を取り扱う。Start Readingのページなので、読むことを中心に学ぶ課であるが、内容理解の後に台本へ書きかえ、劇をする活動につなげることで、聞く、話す、読む、書く、の4技能をバランスよく指導することができる。物語文を台本に書き換えるためには、物語の内容について理解を深め、セリフを追加し、場面にふさわしい動きを考える必要がある。そのため、まずは聞く、読む活動を十分に行なって内容把握をし、その発展として書く、話す活動につなげる。

さらに、劇をするためにグループで役割分担をしたり、音響や動きでよりわかりやすくしようと努めることで、コミュニケーション力や表現力を高める指導になりうると考える。

生徒は中学1年生の半ばであるため、まだ十分な語彙力もなく既習の文法事項も少ない。しかし、読んだ英語を劇にする活動を通して、言語以外の表現を使うこともでき、現在の段階でもさまざまな工夫をすれば英語でも十分に相手に伝えることができ、コミュニケーションの楽しさを学ぶことができると思われる。そして動きをつけてセリフを言うことで、棒読みではなく自然なリズム、イントネーションで英語を話すことができるようになると考える。

指導する上で留意したいことは、劇をするということは観客(=聞き手)がいるということである。普段の会話と同じく、聞き手にとってわかりやすい表現をすることが必要であり、辞書などに頼りすぎて難解すぎる表現にならないように、聞き手のことを考えた台本づくりを進めたい。

#### 3. 単元の目標

- 物語を読み、ことばのおもしろさや英語のリズムを楽しむ。
- 劇をする中で、どうすればわかりやすく伝わるかを工夫する。

#### 4. 評価規準表

コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての 知識・理解
物語を読み、音読する際の工夫点について仲間と協力して考えようとする態度が身に付いている。	劇で登場人物らしく発表をすることができる。 物語を劇の台本に書き換えることができる。	物語を読み、あらすじを理解することができる。 物語を読み、情景を思い浮かべることができる。	自分の知っている物語と比較しながら、英語で書かれた文学作品について学ぶ。

## 5. 指導計画 (全5時間)

第1次	物語を理解する (物語の基礎知識・新出単語・和訳)	(2時間)
第2次	①劇をするために台本に書き換える (本時)	(1時間)
	②動き、小道具、音響など表現の工夫を加えて劇を練習する	(1時間)
	③発表会	(1時間)

## 6. 言語活動のマトリクス

コミュニケーション 単元	言語的コミュニケーション			非言語的コミュニケーション
	インプット	深化	アウトプット	ボディランゲージ等
表現を工夫して劇をしよう	物語を読み、あらすじを理解する。 物語を読み、情景を思い浮かべる。	物語を劇として表現するにあたっての工夫点を、仲間と協力して考え、練習する	物語をグループで劇にして、発表する。	劇の中で動き、音響なども含めて相手によりわかりやすく伝えるための工夫をする。

## 7. 本時

### (1) 目標

- (i) 物語を正しい英語で台本に書き換える
- (ii) 相手によりわかりやすく伝えるために必要な工夫を考える

### (2) 展開

学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
気づき	有名な文学についてのクイズ “Where is this story from?”	正解を当てるだけが目標にならないよう注意する。	(ii)
思考	Alice and Humpty 読み聞かせをするつもりで、自分なりに気持ちを込めて読む工夫を見つける。	読み合いだけではなく、お互いにアドバイスをさせる。	
交流	工夫点を交流し、お互いに読み合って交流する。		いろいろな例を挙げて、動きを入れて練習させる。
発展	内容にふさわしい話し方やジェスチャーを考える。 台本作成	非言語的な表現の工夫を考えさせる。特にセリフと動きの関連についてよりふさわしいものを考えさせる。	
おわり	各役割の準備物など仕事分担		

### 3. 成果と課題

#### 【生徒が作成した劇の台本】

台本①

<セリフ・動き>	<表現の工夫>
① Oh. I'm late! what time is it?	焦って 時計を見る
② what? Don't follow me!! I'm not delicious!!	後ろを振りかえながら
③ wait! wait! Mr Rabbit!! (ウサギが穴に落ちる)	待て! 早く! 効果音
④ The rabbit runs into the hole.	
⑤ Where did he go? This hole? (アリスが穴に落ちる)	ウサギを探しながら 効果音
⑥ Alice follow the rabbit and goes into the hole.	
⑦ Down, down, down.	ゆくと
⑧ She goes to Wonderland.	
⑨ Oh, what is that?	端がはたいてくる。 「Oh, what is that?」
⑩ She asks.	
⑪ An egg is on the wall.	ウサギの壁に
⑫ I'm not an egg.	ウサギは
⑬ it says.	
⑭ My name is Humpty Dumpty.	はさし

台本②

<セリフ・動き>	<表現の工夫>
① "Run, run, run"	ウサギスキップ
② "Oh, a rabbit is speaking English."	「ウサギは英語を話す」
③ "Oh, no! I'm late."	ウサギは遅い
④ "Haha! A rabbit has a watch."	ウサギは時計を持っている
⑤ "Oh no~!"	ウサギは穴に飛び込んで
⑥ "Wow! Where is rabbit?" アリス穴に身を乗り出しウサギの穴に落ちる	アリス 穴の中から聞く
⑦ "Down, down, down~"	アリス 落ちて
⑧ "Ha, it's egg."	アリス 「ハ、それは卵だ」
⑨ "I'm not an egg!"	「私は卵じゃない」
⑩ "Ha?"	
⑪ "My name is Humpty Dumpty"	「私の名前は Humpty Dumpty」
⑫ "He has poor taste in clothing."	「彼の服装のセンスは悪い」
⑬ "Way? not poor!"	「いいえ、いいえ」
⑭ "Your belt is strange."	「あなたのベルトは変だ」
⑮ "It's not a belt, I think cool tie."	「それはベルトじゃない、私はクールなネクタイだと思う」
⑯	

台本③

<セリフ・動き>	<表現の工夫>
Alice①: Oh, what's that?	
Are you a rabbit?	近くにいる。
Rabbit: Yes, I am.	
Nice to meet you.	
Alice①: Nice to meet you too, Mr rabbit.	
I'm Alice.	
Rabbit: Alice, let's sing a song!	
Alice①: Yes, let's!	
	歌「森のくまさん」流す。
Alice①: I'm happy!	
Amm... What time is it now?	
Rabbit: It's... wow!	
I'm late x3!	ウサギが遅い。
Alice①: Wait! Wait! Wait!	穴の周りを一周して
Alice①: A —	車が穴から退場

曲  
場面  
地  
の  
い

Humpty: It's wonder land.	
Alice②: Thank you.	座っている。
Oh? An egg speaks!?	立っ。
Humpty: I am not an egg,	「一言強調してゆ、」
My name is Humpty Dumpty.	
Alice②: Hello Humpty.	
My name is Alice.	
Alice②: Yay~!	「ハイ、ハイ」
Humpty: ...	歌「森のくまさん」流す。
Alice②: Well...	
Your belt is strange.	
Humpty: It is not a belt.	「一言強調してゆ、」
Alice②: Then, what is it?	
Humpty: A tie, it's around my neck. My mother makes it.	
Al. ...	

## 【劇の発表会後の生徒の感想】

### 良かった点

- ・声が大きくて聞きやすかった。
- ・英語の発音が良かった。
- ・動きが大きく、アリスの世界を表現できていて良かった。
- ・教科書通りの英語ではなく、自分たちセリフをたくさん作って工夫していた。
- ・BGMを工夫していてわかりました。
- ・小道具を使っていたので観ていてわかりやすかった。
- ・ナレーションを入れていたので話の流れがわかりやすかった。

### 改善すべき点

- ・ジェスチャーをもう少し入れれば良かった。
- ・もう少しゆっくり話した方が聞き取りやすかった。
- ・間が空きすぎていた。場面と場面の間をもっとスムーズにすれば良かった。
- ・ダンスや音楽をたくさん入れていたが、英語を話している時間が短すぎた。
- ・棒読みになっていたのもう少し感情を込めたセリフを言えば良かった。
- ・セリフをしっかり覚えたら、もっと表現力があがったと思う。

読み物教材をグループで話し合いをしながら動きや表情などの工夫が必要な劇にすることで、しっかりと読み込むことができ、自分が言いたい事を英語にしようとする態度を身に付けることができた。そして、その英語をジェスチャーをつけたり自然なイントネーションで話したり、間の取り方を考えることで、表現力を身に付けることができた。そして、劇の発表会において、グループごとにお互いの劇の良かった点や改善すべき点を挙げ交流することで、自立し協同する力を身に付けられたと考える。

一方で、劇であることによって表現をジェスチャーや表情に頼りすぎてしまう傾向もあった。使用する英語の発音や文法の正確さをもっと追求しようという動機づけなどの教師による工夫が必要だと感じられた。また、今回は劇であったが、これが日常会話など、台本によらない突発的で自然に行なわれる英語でのコミュニケーション活動でも反映されるような英語指導をこれからもさらに研究していく必要がある。